

項目名：**アウマ, アリス**

見出原綴：Auma

原綴：Alice 諸国語綴：---

別名：アリス・ラクウェナ Alice Lakwena

出現書名：Behrend, Heike, 2000, Mitch Cohen (trans.), *Alice Lakwena and the Holy Spirits: War in Northern Uganda, 1986-97*, James Currey.

生没年：1956-2007.1.17

略歴：ウガンダ，アチョリ民族出身の霊媒。宗教的ゲリラ，聖霊運動（HSM: Holy Spirit Movement）の指導者。

解説：二度の結婚を経験したが子供が生まれず，故郷を離れて孤独に暮らしていた。あるとき突如正気を失い，視力も聴力も失った（85.5.25）。この時に，ラクウェナ（「メッセンジャー」の意）というイタリア軍人の霊に憑依されたのだという。父が11人もの伝統医のところへ連れて行っただが，状態は改善しなかった。パラ国立公園（現在のマーチソン国立公園内）で40日間失踪し，戻ってきたときにはカトリック教徒でありながらアチョリ民族の伝統的な霊媒となっていた。このときの体験が後の聖霊運動（HSM）の中心的な聖典となる。アウマは，ラクウェナに導かれてのことだと述懐した。ティトー・オケロ政権（85.7.29-86.1.26）末期までは，アウマはウガンダ北部のグルの街で占いや霊的な治療をする無名の存在だった。第二次オボテ政権が成立し，激しさを増すムセベニ率いる国民抵抗軍（NRA）と，ウガンダ人民民主軍（UPDF）のゲリラ戦のさなか，占いや霊的な治療は無意味であるから，HSMを組織して悪を滅ぼし，血を流すのをやめさせよとラクウェナに命令されたという。このミッションは首都カンパラの奪回も含んでおり，それを果たして初めて，最悪の被害を出したルウェロ三角地帯で虐殺されたの市民の死霊からアチョリたち自身が解放されることになるのだという。アチョリの伝統的な霊媒にはないことなのだが，アウマは目的によっては他の聖霊たちに憑依されることもあった。それもまたラクウェナの導きなのだとアウマはいう。劇的な勝利を次々におさめ，アウマとHSMはカンパラに南下し，ムセベニ率いるNRAに苦汁をなめさせられた他民族の熱烈な支持を獲得する。しかしやがて軍事的に厳しくなると，アウマは破滅的な結末に陥れるために聖霊を用いるウィッチだという内部告発がなされるようになった。カンパラ近くの森で集中砲火を浴びてHSMは敗走し，アウマはラクウェナが自分のもとを去ったとして，逃亡した。それからはずっとケニア北東部州ダダブ近くのイフォ難民キャンプに住んでいたが，子供の人身売買に関わっていると疑いをもたれたこともあれば（04），HIV（AIDS）の治療法を発見したと発表したこともある（06）。体調を崩し，一週間ほど煩った末に死亡（07.1.17）。病名は不詳。

項目名 **アフエウェルキ**

見出原綴 Afewerki

原綴：Isaias

生没年：1946.2.2-

略歴：エリトリアの政治家。初代大統領

解説：イギリス保護領エリトリアのアスマラ（現エリトリア国首都）生まれ。政府で父が働いていたなど、その背景がエリトリアの元首としての正統性に差し障るためか、公にされた情報は極端に少ない。エリトリア解放戦線（ELF）に参戦（1966）、中国で軍事訓練（67）を受け、ELF 総司令官となるが（69）、思想的、戦略的相違を理由に少数の兵士を連れてELF を離脱、エリトリア人民解放戦線（EPLF）を結成（70）。同じく ELF から分かれた第一次人民解放戦線（PLF1、後のエリトリア解放戦線人民解放軍（ELF-PLF））およびムスリム勢力オーベル（OBEL；同名の川に由来）と連携。PLF1 が〈ハルツーム合意〉でELF と和平を結んだため決別（76）。EPLF 書記長（87）。30年間の激しい武力闘争のなかで常にエリトリア独立の象徴でありつづけた。91年から事実上エリトリアを統治下におさめていたが、国連の介入により国際法上も独立（93）、EPLF を民主正義人民戦線（PFDJ）と改名、政党とし（94）、大統領に就任、一党独裁体制を敷いた。エチオピアとの戦時下にあるとして憲法草案はあるものの施行されていない。15人の政府高官が公開質問状を提出、諸外国の介入を求める抗議行動に出た（2001）。首謀者のうち11人を裁判にかけずに拘留している（10現在）。

項目名：アミン・ダダ

見出原綴 AminDada,

原綴：Idi

生没年：1928.1.1-2003.8.16

略歴：ウガンダの軍人、政治家。

解説：生年には諸説あり、1924年接1928年説もある。幼名をイディ・アウォ＝オンゴ・アンゴー Idi Awo-Ongo Angoo。北部の西ナイル地区アルアのカクワ族農民の父とルグバラ族薬草師である母との間の子として生まれ、イギリス植民地軍(王国アフリカ人ライフル銃隊)に入隊(1946)。ウガンダ独立(62)の翌年大尉。以後国軍の中枢にあって昇進をつづけ、陸・空軍司令官(66)、大将(68)。クーデターによりオボテ政権を打倒して軍事政権を樹立し、大統領に就任(71)。経済のアフリカ化の一環として外国籍アジア人約5万人を国外に追放する(72)など思いきった政策をとったが、徐々に独裁色を強め、終身大統領に就任(76)。国際的にはアフリカ統一機構議長（OAU: Organisation of African Unity）(75-76)として名を高めたが、近隣諸国との対立、紛争がたえず、国内では度重なる粛清事件を起こして国民の不信を買った。自ら任命した元総理大臣であり最高裁判事ベネディクト・キワヌカ Benedicto Kiwanuka をはじめ国立マケレレ大学副学長、新聞編集長、中央銀行総裁などを抹殺したとされる。ことに1977年ウガンダ教会大主教を自身の二人の閣僚とともに殺害したとされる事件は世界的な非難の的となった。その政権時に粛清された犠牲者の数は、

300,000 人とも 500,000 人とも推計されている。タンザニア領侵犯事件を契機に、タンザニア軍の支援を受けた亡命ウガンダ人からなるウガンダ民族解放戦線によって武力で打倒され、リビア経由(79)、サウディ・アラビアへ亡命した。亡命時の約束通り、生涯沈黙を守った。2003 年、重病が伝えられる。二度の腎臓移植も功を奏さず、死亡(03)。死亡時の体重は 220 キログラムあったと伝えられる。遺体はサウディ・アラビアで埋葬。イスラームの慣習にのっとったとも、ウガンダ大統領ヨウェリ・ムセヴェニが遺体の搬送・入国を拒否したためとも言われる。独立後のウガンダの国家元首としては唯一国葬が行われなかった。

項目名：**オボテ**

見出原綴：Obote

原綴：Apolo Milton

生没年：1924.12.28-2005.10.10

略歴：英国保護領ウガンダ、ランゴ県アココロ村生まれ。ブソガ高校卒、マケレレ大学中退。ウガンダで建築関係の仕事を経験した後ケニアで独立運動に参加。ウガンダ国民会議（UNC: Uganda National Congress）に参加（56）。独立を準備する立法審議会議員（58）。UNC の一派を引き連れてウガンダ人民連合（UPU: Uganda People's Union）と合流。ウガンダ人民会議（UPC: Uganda People's Congress）結成し総裁となる（60）。ガンダ王（カバカ）を党首にいただくカバカ・イェッカ（王あるのみ）と連立を組む（61）。首相（62-66）、大統領（66-71、1980-85）。2005 年 10 月 10 日、ヨハネスブルグの病院で死去。

解説：独立時の首相として辣腕をふるったが、議会でアミンと謀って行っていたザイールから金の密貿易を指摘されたのをきっかけに憲法を停止して自ら終身大統領となる（1966）。これに反対したブガンダ議会が独立を宣言すると、ガンダ王の王宮をアミン率いる国軍に攻撃させ、ガンダ王フレディ・ムテサ二世を亡命させしめた。1969 年からは自ら「左への動き」と称して国内企業と銀行の株の 50 パーセント以上を国有化するなど社会主義的政策をとり、部族主義を批判した。1971 年、シンガポールで行われた英連邦首脳会議に出席中アミン参謀総長の軍事クーデターにより失脚するも（1971.1.25）、タンザニア軍の援護を得てアミンを敗走させ、ふたたび大統領に（1980）。1985 年、ふたたびクーデターでタンザニアに逃れるとザンビアで亡命生活を送り、絶えず返り咲きの機会を狙っていたが、死去するまでウガンダの土を踏むことはなかった。ムセベニ大統領はその死にたいして国葬をもって遇した（2005）。

著作：*The Common Man's Charter: First Steps for Uganda to Move to the Left*, Entebbe: Government Printer, 1970.

項目名：**ポール・カガメ**

見出原綴：Kagame

原綴：Paul

生没年：1957.10.23-

略歴：ルワンダ大統領（2000.3- ）。軍人。ルワンダ愛国戦線（RPF）最高司令官。

解説：ベルギー領ルアンダ＝ウルンディ、ギタラマ県ルハンゴ生まれ。フツの反乱（59）によりツチ系のカガメはウガンダ西部のカフンゲ難民キャンプで育つ。ウガンダ，ナタレ高校出身。ヨウェリ・ムセヴェニ（Yoweri Kaguta Museveni:1944-）率いる国民抵抗軍（NRA）に参加し（1979），オボテ（Apolo Milton Obote:1924.12.28-2005.10.10）独裁政権打倒を目指すゲリラ活動を行う。オボテがティトー＝オケロ（Tito Lutwa Okello:1914-1996）の率いる軍クーデターにより追われ（85），国民抵抗軍がさらにオケロ軍を敗走させてムセヴェニが大統領に就任（86）するころカガメは盟友ルウィゲマ（Fred Gisa Rwigema:1957-1990）とともに国民抵抗軍内部のツチ系勢力を中心にルワンダ愛国戦線（RPF）を組織した（86）。籍はウガンダ国軍におき国民抵抗軍情報部長官（86）としてムセヴェニの腹心だった。1990年10月，RPFはウガンダを拠点として国境を越えルワンダに展開するが，ジュベナール・ハビヤリマナ（Juvénal Habyarimana:1937.3.8-1994.4.6）政権を支持するフランス，ベルギー，ザイルとルワンダの連合軍に阻まれ，開戦後2日にして司令長官ルウィゲマが戦死。後を受けてカガメがRPF司令長官に就任（90）。長期化し膠着するゲリラ戦を指揮した。カンザス州フォートレヴェンワースの陸軍軍事教練センターで軍事訓練（90）を受けた際のネットワークがアメリカ，イギリスの援助に繋がったとされている。タンザニアの仲介で「アルーシャ合意」後一時和平が結ばれ（93.8），ハビヤリマナ暫定政権が成立した。しかし1993年10月，隣国ブルンジでフツのンダダイエ大統領（Melchior Ndadaye:1953-1993）が暗殺され，ラジオ放送などのマス・メディアを通じた反ツチの扇動が激化した。1994年4月6日，ハビヤリマナ大統領とブルンジ大統領シプリアン・ンタリヤミラ（Cyprien Ntaryamira：1955.3.6-1994.4.6）を乗せた航空機がキガリ国際空港上空で撃墜され，フツによるツチの虐殺，いわゆるルワンダ虐殺の端緒となった。死者は800,000とも1,000,000とも推計されている。RPFはツチ保護を名目に全土を制圧し，パステール・ビジムング（Pasteur Bizimungu:1950-）を大統領とする新政権を樹立した（94.6）。カガメは副大統領兼国防相となったが，事実上の指導者と目されていた。やがて政策上の意見が対立してビジムングは辞職し，大統領に就任（00.3）。二期目も最初の国民選挙で95.5パーセントの得票率といわれる圧倒的な指示を受けた。（03.7.25）。1994年の虐殺時に国連の果たした役割に批判的な立場をとる一方で中国に対して非常に高い評価を下している。

項目名：キゲリ5世，ンダヒンドウルワ

原綴：Kigeli V Ndahindurwa

生没年：1936.6.29-

略歴：ルワンダ王国王（ムワミ，在位：1959.7.25-1961.1.28）。

解説：ベルギー委任統治領ルアンダ＝ウルンディ，現在のルワンダ，カメンベに生まれる。

先例を受けており，ジャン＝バチストという洗礼名を持つ。ルワンダのアストリダ学院卒

業後、コンゴのニャンゲジ・コレッジ卒業。ムタラ・ルダヒグワ Mutara Rudahigwa が原因不明の市を遂げた後に王位に就く (59)。折りしもフツ民族による反乱が勃発 (59)。キゲリ 5 世は国連事務総長ダグ・ハマースホルド Dag Hammarskjold とコンゴ共和国 (当時)、キンシャサで会談のため外遊中、首都を急襲したドミニク・ムボニユムトゥワ Dominique Mbonyumutwa (未詳-1986.7.26) 率いる反乱軍によって制圧され、政権を失った (61)。反乱軍の背後にはベルギー軍の存在があるといわれる。これにより王政は廃止され、ドミニク・ムボニユムトゥワは暫定初代大統領となる (在任は 1961.1.28-1961.10.26)。亡命したキゲリ 5 世は、タンガニーカ (61)、タンザニアのダル・エス・サラーム (61-2)、ケニアのナイロビ (63-71)、ウガンダのカンパラ (72-78)、そして再びナイロビ (79-92) を転々と暮らした。1992 年アメリカにより政治難民と認定され、以降ワシントン D.C.に住む。世界各地でルワンダ虐殺と異民族の調和を説く講演を行っている。現在はキゲリ 5 世王財団の長であり、ルワンダ難民の人間らしい暮らしをもたらすための活動に従事。特に功績のあった個人には勲章を与えている。

項目名：キバキ, ムワイ

見出原綴：Kibaki

原綴：Mwai Emilio Stanley

生没年：1931.11.15-

略歴：ケニア共和国第三代大統領 (2002.12.30-)

解説：ケニア植民地、現在のケニア共和国ニエリ県、オタヤ地区に生まれる。キクユ人。ガトゥヤイニイ小学校、カリマ・カトリック・ミッション・スクールで初等教育を受け、現在のニエリ高校 (44-46)、マング高校 (46-50) 卒。在学中もバスのコンダクターなどでアルバイトをして生計を立てていた。軍に入隊を希望していたが植民地行政の方針でキクユは軍人にはなれなかった。ウガンダのマケレレ・カレッジに進学して経済学、歴史、社会科学を学ぶ。首席で卒業 (51-54)。シェルに一時就職するが、奨学金を得てロンドン経済学院 (LSE) へ留学、財政学を優秀な成績で卒え、マケレレに戻り経済学講師となる (59-60)。ジョラモギ・オギンガ・オディンガの誘いでケニア・アフリカ民族同盟 (KANU) に入党。ケニア独立時の憲法起草に関与する。ケニア独立後初の選挙でナイロビ・ドンホーム選挙区から国会議員に立候補、当選 (63)。財政副大臣兼経済計画会議議長 (64-66)。商工大臣 (66-69)、財務大臣 (69-70)、財政経済計画大臣 (70-78) を歴任。ドンホームからは新しい有力な候補者が出現しやすいところから故郷オタヤに選挙地盤を移し、当選を続ける (79, 83, 88, 92, 97, 2002, 2007)。ケニヤッタの死後、モイが第二代大統領となると、財務省兼副大統領 (78-82)。内務大臣兼副大統領 (82-88)。厚生大臣 (88-92)。複数政党制を禁じる憲法第 2 A 条撤廃後すぐに KANU を離党。民主党 (DP) を結成。1992 年の大統領選では 3 位に終わり、1997 年には 2 位だった。モイ引退後の 2002 年の大統領選では DP は他の野党と手を結び、国民虹連合 (NARC) を組織、モイが後継者に指名したウフルー・ケニヤッ

タ (Uhuru Muigai Kenyatta:1961.10.26-) を破り、キバキは大統領就任 (02)。モイ長期独裁政権と冷戦崩壊で弱体化した経済立て直しと初等教育無料化に取り組んだが健康不安もあり、批判が相次いだ。野党の要求のうち焦点となったことのひとつは、長かったモイ独裁政権時に大統領に一極集中した権力をいかに分散させるか、というものであった。大統領政府の提示した憲法改正案も否決 (05) され、苦しいなかで国民統一党 (PNU: Party of National Unity) 党首として二期目に挑む大統領選を迎えた (07.12.27)。選挙管理委員会によってキバキ当選が宣言され、大統領就任を宣言したが、対立候補であったオレンジ民主運動 (ODM) 党首オディンガ (Raila Amolo Odinga:1945.1.7-) 側が選挙に不正があったと告発、EU 選挙監視団も投票がキバキ有利に操作された、との見解を示した。このことは、キバキ支持のキクユ人とオディンガ支持のルオ人との民族紛争に発展し、各地で暴動が相次いだ。現在でも真相は明らかになっていない。コフィ・アナン元国連事務総長の仲介で両者は和解し、キバキはそれまでの憲法下ではなかった内閣総理大臣職を新設。オディンガを独立直後のケニヤッタに次いで第二代内閣総理大臣として迎えた (2008-)。

項目名：**ケニヤッタ**

見出原綴 Kenyatta,

原綴：Jomo

別名：本名：Kamau wa Ngengi

生没年：1891.10.20-1978.8.22

略歴：ケニアの政治家。

解説：キクユ人の農民の子として英領東アフリカのガトウンドゥ、ンゲンダ村に生まれ、スコットランド系ミッション・スクールで教育を受けた後、受洗 (14)。ナイロビの水道局に勤務したが (22)、ハリー・トゥク事件(1922)を契機に反英運動に身を投じ、キクユ中央連盟 (KCA) 書記長となる(28)。キクユ人の連帯を訴え、キクユ語月刊新聞『ムウィグウィサニア』(「和解する者」の意)を編集。白人移民による土地収奪に抗議し、ケニア立法審議会にアフリカ人議席を要求するために渡英(29)。さらに再度渡英し(31-46)、反植民地主義的政治活動にたずさわる一方、モスクワ大学で経済学を (32-33)、ロンドン大学経済学部 (LSE) でマリノフスキーの指導で社会人類学を学ぶ (34-38)。提出論文を最初の著書『ケニヤ山のふもと』として出版。著者名としてケニヤッタの名を初めて用いた。諸説あるが、「燃える槍」の意である。第二次大戦中キクユ中央連盟が非合法化されたため、サセックスの農場で労働者教育組合で教えながら活発な著作活動を続けた。戦後政治活動を再開し、ガーナのクワメ・ンクルマらと第5回汎アフリカ会議(マンチェスター)を組織 (45)。帰国(46)後、ギトゥングリ・ケニア教員養成校の校長をつとめた後、ケニア・アフリカ人同盟 (KAU) 総裁に就任(47)して独立運動を指導。マウマウ事件(52-57)を指導したとして逮捕され(52)、97年間獄中生活の後トゥルカナ湖畔のロドワに軟禁。ケニア・アフリカ民族同盟 (KANU) の要求で解放され総裁 (61)、立法審議会議員 (62)、連立政権で憲法・経

済計画関係担当大臣 (62-63) を経て、ケニアの独立(63)とともに初代首相。共和制移行(64)によって初代大統領。さらに終身大統領(74)。心臓発作に悩まされ (66, 67), 74 年死亡。建国の父として「ムゼー」(長老) と親しまれた。ナイロビ市内に廟がある。

著作：[主著] Facing Mt.Kenya, 1938.

『ケニヤ山のふもと』(野間寛二郎訳) 理論社, 1962,

Suffering without Bitterness, 1968 ほか多数。

項目名：ケベデ

見出原綴 Kebede

原綴：Liya

生没年：1978.1.3-

略歴：モデル，世界保健機関（WHO）親善大使

解説：エチオピア，アディスアベバ出身ニューヨーク在住のファッション・モデル。アディスアベバで通学中，スカウト。ニューヨークへ移住。エチオピア人の金融業者と結婚(00)。グッチの2000年秋冬コレクション・キャンペーン・モデルとして有名に(00)。世界的ファッション・モデルとして『ヴォーグ』誌の表紙を二度にわたって飾るなど人気を博し，世界保健機関（WHO）妊婦，新生児，幼児親善大使(05)。

項目名：シサノ，ジョアキン・アルベルト

見出原綴：Chissano

原綴：Joaquim Alberto

生没年：1939.10.22-

略歴：モザンビークの元大統領（第二代：1986.11.2-2005.2.2）。

解説：ポルトガル領東アフリカ（現モザンビーク）ガザ州出身。首都ロレンソ・マルケス（現マプト）にあるポルトガル領東アフリカ唯一の高等学校に入学を許可された最初の黒人学生だった。アフリカ人高等学校学生組織（NESAM）を結成してその長となる。リスボン大学医学部に留学するが，政治活動のため勉学を断念。モザンビーク解放戦線（FRELIMO）を創立(62)。独立後，暫定政権首相(74)，外相(75-80)，首相(80-86)。モザンビーク解放戦線を率いていた折から過激なマルクス主義と穏健派との仲介役で知られる。独立時の階級は少将。FRELIMOは党となり，大統領マシエルは社会主義の一党独裁体制をすすめたがシサノは例外的に閣僚にとどまった。反政府組織のモザンビーク民族抵抗運動（RENAMO）との内戦が勃発(77)。大統領マシエルが飛行機事故で急死してからは，大統領(86)として長い内戦による経済の疲弊を立て直すために社会主義体制を放棄(89)，複数政党制と自由主義経済にもとづく憲法を制定。南アフリカなど西側と交渉を進め，現実路線の国策を打ち出した。和平協定が結ばれて内戦が終結後(92)，イギリス連邦加盟(95)，ポルトガル語諸国共同体加盟(96)。その政権下では英国のBHPブリトンと三菱商事，南ア

フリカ開発公社とでアルミニウム精製会社モザールを設立され (98), モザンビーク経済の高度成長の基礎をつくった. アフリカ連合 (OAU) 第二代総長 (2003-2004). 憲法では三選まで認められているが, 二期で退任 (2005). ユニークな政策として精神面の安定を図るためインドに由来する超域瞑想法を軍や警察に導入した点があげられる (94). 大統領退任後は, コフィ=アナン国連事務総長の任命で特別全権大使 (06) としてウガンダ東部とスーダン南部のゲリラ, 「神の抵抗軍」(LRA) 問題に取り組んだ. アフリカの優れたリーダーシップを示した人物に対する第一回モ・イブラヒム賞受賞 (2007). 受賞理由は「紛争から平和と民主化に導いた」ことである. 現ジョアキン・シサノ財団議長.

項目名: **ゼナウィ, メレス**

見出原綴: Zenawi Asres

原綴: Meles

生没年: 1955.5.8-

略歴: エチオピア連邦民主共和国の政治家, 暫定政権大統領 (1991.3.28-1995.8.22), 首相 (1995.8.23-).

解説: エチオピア帝国ハイエ・サラシエ 1 世統治下のティグレ州アドワに生まれる. アデイス・アババのウィングート将軍記念高校卒. ハイエ・サラシエ大学 (現在のアデイス・アババ大学) で 2 年間医学を学ぶが中退して, 反政府勢力ティグレ人民解放戦線 (TPLF) に加入 (75). ティグレ・マルクス=レーニン主義者同盟を結成. メンギスツ・ハイレ・マリウム (Mengistu Haile Mariam:1937.3.21-) 大統領政権に対抗する武装勢力 TPLF のなかでも人望をあつめ, 中心人物として統率委員会委員 (79), 執行会議委員長 (83). TPLF とエチオピア人民革命民主戦線 (EPRDF) 双方の書記長だった. EPRDF 軍事勢力はメンギスツ政権を倒し (91.5), 国連や EC, アメリカ, イギリスなどが見守るなか国民総会において暫定政権 (TGE) 大統領に選出 (91.7). その任期中にエチオピアに対し 1961 年から独立闘争を続けていたエリトリアが連邦から脱退した (93). 続く最初の選挙で首相に就任 (95). 首相の激職のかたわらオープン大学 (イギリス) から MBA を取得 (95), エラスムス大学 (オランダ) から経済学修士号を取得 (04). 韓南大学名誉博士 (02). エチオピア=エリトリア国境紛争では (98-), エリトリアに甘いと批判された. 2000 年の総選挙で首相に再選 (00). 2005 年の選挙でも勝利宣言をするが, 反対勢力が選挙に不正があったと抗議し, 暴動やデモが繰り返された. この混乱で 193 人の国民が死亡し, 7 人の警察官が死亡, 75 人の警察官が重軽傷を負った. 数え切れないほどの国民が重軽傷を負い, 投獄された. EU 選挙監視委員会は, 選挙が国際基準に照らして正しく行われなかったと結論づけ, カーターセンターは, 選挙は公平に行われたが, 様々な不正と権力行使が行われたと結論づけたが, このときカーターセンターは報告書を公表しなかった. アデイス・アババ選挙区では CUD は不正があったとして結果受け入れを拒否したが, 結果は CUD の圧勝だった. CUD は結果が出る前からメレス政権の評判を毀損しようともくろんでいた節がある. 政府へ激

しい批判が浴びせられたが、エチオピア裁判所は投獄された CUD 中心人物のうち 38 名に有罪判決を下し、選挙後の暴動の責任を認める文書に署名させられた。外交的にもメレス政権の課題は多く、長引くエリトリアとの険悪な関係のほかにも、スーダンのアニュアク問題への介入 (03)、ソマリアに対する内政干渉 (06)、第二次オガデン紛争 (07-) など、人間の安全保障の観点から国際問題になっている政策も多い。

項目名：チレンブウェ

見出原綴 Chilembwe,

原綴：John 諸国語綴：---

別名：--- 出現書名：--- 生没年：1871?-1915.2.3

略歴：マラウイ(旧英領ニヤサランド)の独立教会運動指導者、反英運動指導者。

解説：サンガノに生まれ、スコットランド系のバプティスト教会

バプティスト教会で教育を受けたのち渡英(1897)。さらにアメリカに移って、ヴァージニアの黒人バプティスト神学校に学ぶ(98-1900)。帰国(1900)してバプティスト教会牧師となり、<プロヴィデンス・インダストリアル・ミッション>を設立。苛酷な労働条件のもとに働くアフリカ人労働者の救済に深い関心を抱き、白人プランテーション内に共同体における労働の意義、自由そして自助努力などを説く 800 人の成年を含む 2000 人近い学生を擁す学校、独立教会

独立教会を創設した。1913 年の飢饉に直面。続く第一次世界大戦の勃発で多くの学生が徴兵され、困窮する労働者たちの実態を目の当たりにし、不平等を告発し、200 人あまりの労働者と、プランテーション所有者を筆頭とする白人男性をターゲットとした武力蜂起。

(15)。支持を失うとモザンビークへの亡命を試みる。同じ問題意識を抱えていた近隣への蜂起を促す手紙が届いたときには遅く逮捕・殺害された。この間半月に満たなかった。白人の女性・子供の被害は報告されていない。人種的、植民地主義的不平等に対する抗議運動の影響は少なくなかった。今日、独立の英雄として毎年 1 月 15 日に「ジョン・チレンブウェ記念日」が祝われている。

項目名：ツァンギライ、モーガン

見出原綴：Tsvangirai

原綴：Morgan Richard

生没年：1952.3.10-

略歴：ジンバブエの政治家。首相(2009.2.11-)、ツァンギライ民主変革運動党党首(2005.3.31-)。

解説：南ローデシア、グトゥに生まれる。早くから学校を離れ、中央マシヨナランド州のニッケル鉱山で約 10 年間働く(74)。28 歳の頃ロバート・ムガベ率いる ZANU-PF 党に入党(80)。ムガベ支持者として順調に党内で出世していった。ジンバブエ商業組合会議(ZCTU)事務総長に就任(89)。ZCTU は ZANU-PF と距離を置いた活動方針をとったため、ツァン

ギライの発言力が強くなることを恐れ、数回刺客を送り込まれ暗殺されかけている。悪評高いグクラフンディ作戦など、反対派を軍隊を使って鎮圧するムガベ大統領及び党の方針に決別し、民主変革運動（MDC）を結成（99）。当時ムガベは白人農場主たちの農場を強制収用する計画をもっていたため、MDCには白人農場主の支持者も多かった。ZANU-PFの大統領の権限強化を盛り込んだ新憲法草案に反対する運動を続け、国民投票で阻止（00.2）。議員選挙ではMDCは結成当初3つしかなかった議席を57にのぼし、与党の62議席にせまる躍進を見せた（00.6）。政府は白人農場主たちの農場の強制接収を開始（00.8）。反対するMDCにも政府の弾圧は続き、ツァンギライも反ムガベのキャンペーンを張ってゆずらず、ムガベ大統領脅迫の疑いで逮捕（00.10）。大統領選に立候補するが、得票率42.0パーセントで、56.2パーセントのムガベに敗れた。英連邦や日本の選挙監視団は、自由かつ公正な選挙とはいえない、としてジンバブエへの制裁を強化した。選挙後与野党の関係は一層陰悪になり、MDCが大規模なデモやサボタージュを実施し、政府はそのたびにMDC党员や支持者を逮捕連行した。ツァンギライも再び大統領暗殺計画の疑いで逮捕されている（03）が、高裁は判決の無期限延期を宣言した（04.7）。こうしたなかMDCもツァンギライ派とムタンバラ（Arthur Gusei Oliver Mutambara:1966.5.25-）派に分裂（05）。下院議会選挙では、120議席中78議席、指名議員を含めると108議席を獲得した与党に大幅に後れをとることとなった（05）。選挙後も治安は悪化の一途を辿り、大統領は「秩序回復作戦」などとして、不法住宅や商店を警察に破壊させた。ハラレで行われた教会の集会を警察が襲った際にツァンギライはまたも逮捕され、暴行を受け、負傷している（07.3）。2008年の大統領選挙では、第一回選挙（08.3.29）、ツァンギライ47.9パーセント、ムガベ43.2であり、MDCも決選投票準備を行ったが警察の数度に及ぶツァンギライの拘束で選挙活動を妨害され、党幹部の逮捕、そしてMDC支持者が相次いで殺害されるに及び、選挙から撤退を表明（08.6.22）。ツァンギライとムガベの間で、連立のための会談がもたれた。軍や警察のポスト配分を巡って対立するが、ムガベ側におし切られた格好で連立が成立。閣僚はZANU-PFから15人、MDCツァンギライ派から13人、MDCムタンバラ派から3人の連立内閣が成立し、ムタンバラは副首相、ツァンギライは首相に就任した（09.2.13）。首相就任後も不審な交通事故に遭遇、ツァンギライは助かったが、同乗していた妻を失っている（09.3.6）。

項目名：**ティブ、ティップー**（本名はハメド・ビン・ムハンマド・ラジャブ・ビン・ムハンマド・ビン・サイイド・アル＝ムルジェビ）

見出原綴：Tip

原綴：Tippu

別名：Tippu Tib, 本名：Hamad bin Muḥammad bin Jumah bin Rajab bin Muḥammad bin Sa'īd al-Murghabī

生没年：1837-1905.6.14

略歴：ザンジバルの奴隷・象牙などを扱う行商人。

解説：スワヒリ商人の父とアラブ人の母（オマーンの支配階級出身とされる）の間に生まれた。父も父方の祖父も、最も早い時期にアフリカ内陸部にまで遠征した海岸スワヒリ行商人だった。父方の祖母は、ラジャブ・ビン・ムハンマドの妻であり、マスカットの裕福な一族の出身であるムハンマド・エル・ネバニの娘で、後にダル・エス・サラームになる小さな村の出身だった。成人すると、インド人商人から資本を借りてビーズや綿布をアフリカ大陸内陸部のマーケットに供給するための運搬事業に着手した。主な運搬手段は奴隷だった。奴隷商人だった父の人脈を駆使して大規模なキャラバンを組織し、それを率いてザンビア北部で奴隷、象牙などの略奪を行うようになる。1860年代のことである。荷物をなくし、食料も底をついた探検家で宣教師のデヴィッド・リヴィングストン（David Livingstone:1813.3.19-1873.5.1）を保護したのもこのころのことである（1867）。さらにヴァーニー・ロヴェット・カメロン（Verney Lovett Cameron:1844.7.1-1894.3.24）やヘンリー・モートン・スタンリー（Sir Henry Morton Stanley:1841.1.28-1904.5.10）らアフリカ内陸部の事情を知らない西洋人たちの探検を援助した（1874,1876）。アフリカ大陸内陸部に数多くの長距離交易の中継地点を築くことに成功したティブは、タンガニカ湖西南部（現在のコンゴ東部）の商業を独占するようになる。ついには、「ウテテラのスルタン」を自称し、ザンジバルのスルタン（王）バルガシュ・ビン・サイイド（Barghash bin Said el Busaidi:治世1870-1888）とともにタンガニカ湖西南部の所有権を主張した（1884-87）。ザンジバルのスルタンたちと同じくタンガニカに対する利害関心を保ちつつも西洋人との関係も円滑に保った。スワヒリとベルギーのレオポルド二世（Léopold II:1835.4.9-1909.12.17）の派遣団との間で争いが起こったときにも、円満な話し合いに終始している（1886.8）。コンゴはベルリン会議でレオポルド二世の領有が確認されたが、スタンリーはスタンリー滝の県長官に就任を求め、レオポルド二世もバルガシュ・ビン・サイイドも同意し、ティブもこれを受け入れている（1887.2.24）。ザンジバルに戻って引退後の余生を過ごし（1893）、スワヒリ語、アラビア文字綴りで自伝『ウテテラのスルタン』を残した。生前のティブを知るハインリッヒ・ブローデ博士（Dr. Heinrich Brode）によりドイツ語訳が出版、後に英訳もされている（1907）。ブローデは、ティブの死因はマラリアだったと書き残している。

著作：Brode, Heinrich, 1907, *Tippu Tib: The Story of His Career in Zanzibar & Central Africa*, Trans, H.Havelock, London: Arnold.

項目名：ディリー, ワリス

見出原綴 Dirie

原綴：Waris

生没年：1965-

略歴：ソマリア出身のファッションモデル、人権活動家、作家。デザート・フラワー財団会長。

解説：エチオピア国境付近のソマリア、ガールカクヨの砂漠に生まれた。父はダロッド氏

族，母はハウィエ氏族の遊牧民出身．5歳のとき女子割礼（より直裁に近年女性器性器切除（FGM）の用語が用いられる）を受ける．姉はFGMのために亡くなり，弟は餓死したという．13歳のころ，祖父ほど年の離れた男性との結婚を強要されたのを機に，首都モガディシュに逃れる．駐英大使館のメイドとしてロンドンへ．大使の任期終了帰国後もロンドンに留まり，マクドナルドの店員をしていたところを写真家テレンス・ドノヴァン（Terence Daniel Donovan:1936.9.14-1996.11.22）に見いだされる（83）．ピレリのカレンダーのグラビアを飾る（87）．ニューヨークに移住し，シャネル，リーバイス，ロレアルなどの広告などに出演．「007 リビング・デイズ」で映画デビュー（87）．ファッションモデルとして「ELLE」「ヴォーグ」などのグラビアを飾る．BBC がディリーを主演としたドキュメンタリー「ニューヨークのノマド」を放送（95）．FGM 体験について「Marie Claire」誌で公表（97）．コフィ・アナン国連事務総長の依頼で，国連特別大使として FGM 廃止を訴えて各地で活動（97）．自伝『デザート・フラワー』（邦訳『砂漠の女ディリー』）を出版，千百万部のベストセラーとなる（97）．後に民族学に造詣の深いプロデューサー，ペーター・ヘルマン（Peter Herrmann）製作で映画化（08）．主演のリヤ・ケベデ（Liya Kebede:1978.1.3-）は，WHO 妊婦，乳幼児支援の親善大使として活躍（05-）．オーストリア・ウィーンを拠点に FGM を「文化でも伝統でも宗教でもない犯罪」としてその廃止をもとめる社会活動の基盤「ワリス・ディリー財団」を設立（02）．オーストリア市民権取得（05）ディリー個人を超えたより広い FGM 廃止活動を支援するため「デザート・フラワー財団」と改名（10）．フランス政府からレジオン・ドヌール勲章（07），マルティン・ブーバー金メダル受賞（08，ドイツ），イタリア大統領金メダル受賞など各国から表彰されており，その多くは女性で初の受賞である．

著作：Desert Flower, 1998. 『砂漠の女ディリー』 武者圭子訳，1999，草思社

Desert Dawn, 2004. 『ディリー，砂漠に帰る』 武者圭子訳，2003，草思社

項目名：ニエレレ

見出原綴 Nyerere,

原綴：Julius Kambarage

生没年：1922.3-99.10.14

略歴：タンザニアの政治家．

解説：ヴィクトリア湖近くのブティアマにタンガニーカに 113 ある部族のうち最小のザナキ族首長の子として生まれ，マケレレ大学(ウガンダ)卒業後，タンガニーカ聖メリー小学校で生物と英語の教師となる．タンガニーカからはじめての英国留学生としてエディンバラ大学大学院で経済学・歴史学修士．帰国(1952)して聖フランシス・ローマ・カトリック・カレッジで教鞭をとりつつ政治活動に入り，タンガニーカ・アフリカ民族同盟(TANU)を創設して議長となり(54-77)，独立を準備する立法審議会議員（57）．~~独立運動を指導。~~独立達成とともに初代首相(61)，一ヶ月後に旧宗主国ではなく国民主導の政権改革を理由に一度首相

を辞任した後、初代大統領(62/64)。独立後政情不安となったザンジバルを安定させるため尽力したのみならず、ザンジバルと合邦してタンザニア連合共和国が成立すると初代大統領(64-)。この連合は、名目だけのものではなく輸出入などの主導権や自由を保証し、ザンジバルの自治を認めたものだった。在任中も半数の閣僚を更迭するなど大胆な政権の構造改革を推し進めた(65)。最も大きな功績となった「アルーシャ宣言」は、都市ではなく農村から、農業に焦点を当てた自立更生路線の開発、および国家建設理念を打ち出し、草の根運動として注目を集めた(67)。TANUとアフロ・シラジ党(ザンジバル)を合併して革命党(CCM)を組織し議長(77-)。家族的友愛を強調する独特のウジャマー社会主義を標榜し、「アルーシャ宣言」の理念を発展させた。汎アフリカニズムの推進者としても目立った存在であり、第6回汎アフリカ会議を主催して議長をつとめた(74)。また前線諸国の指導者として南部アフリカ問題の解決に貢献した。1990年にムウィニイが後継となるまで、CCM幹事長。ラップやヒップホップなどに肯定的評価を示していたことでも知られる。異名は「先生」(ムワリム)。国連総会で「社会主義の英雄」と評された(2009)。

著作：[主著] Freedom and unity, 1966 ; Freedom and socialism, 1968 ; Ujamaa: essays on socialism, 1969.

項目名：バーレ, モハメド・シアド

見出原綴：Barre

原綴：Mohammed Siad 諸国語綴：Barre, Maxamed Siyaad (ソマリア語)

生没年：1919.10.6-1995.1.2

略歴：ソマリアの政治家、軍人。第三代大統領(1969.10.21-1991.1.27)。

解説：エチオピア帝国オガデン地方、シラボ付近で生まれる。ソマリア最大のダロッド氏族の支族、マレハン族出身。現在のソマリア南部、ゲド州ルーク県で初等教育を受けた後、首都モガディシュに出て中等教育を受けたとされる。英国に軍事支配されていた時代の植民地警察に入隊。イタリアのカラビニエ警察学校に留学(52)。独立時にはソマリア陸軍副司令官(60)。ソビエト陸軍と合同演習を繰り返し、マルクス主義を知る。独立後のソマリア共和国は、民主主義的な体制のなかに氏族の利害が投影され、氏族やその支族を単位とする政党が多数存在し、情実人事や汚職が蔓延した。第二代大統領アブディラシッド・アリー・シェルマルケ(Abdirashid Ali Shermarke:1919-1969.10.15)が暗殺されると、大統領の葬儀の翌日軍がクーデターを起こし、モガディシュを制圧(69.10.21)。最高革命評議会(SRC)が設置され、バーレは大統領に就任(69.11.1)。SRCは前政権のメンバーを逮捕し、政党活動を禁止、国会を解散して憲法を停止、自立・自助・社会主義の三原則とする科学的社会主義国家への転換を宣言して国名を「ソマリア民主共和国」と改名。大統領として銀行国有化、農業・牧畜産業の強化、ソマリア語の標準表記法の制定、識字率の向上、男女平等、女性の社会進出、長期公共事業計画などを推進した。アラブ世界との結びつきを強調し、アラブ連合(AL)加盟(74)。アフリカ統一機構(OAU)議長(74)。急進的な改革案には

反対派も多く、クーデターや暗殺未遂事件が頻発した。司法も軍の統制下に置き、抗議行動を起こした反対派には処刑で応じた。ソマリ社会主義革命党（SRSP）の一党独裁体制を確立し書記長となった（76）。氏族の縁故主義も復活し、政府の中枢に残ったのは、マレハン族、オガデン族、ダルバハンデ族ばかりとなった。10年にわたるエチオピアとのオガデン戦争（77-88）でエチオピア側についたソ連との関係を断絶してアメリカとの関係を強化し、空港や港の使用権と引き替えに経済援助や軍事援助を要求した。82年からは内戦が激化し、経済は落ち込み、国内の支持者は激減した。同じ頃、氏族主義で冷遇されてきたイサク族やダロッド氏族支族マジヤティーン族などが、時期を同じくしてソマリ民主戦線（SSDF）やソマリ国民運動（SNM）などの運動を隣国エチオピアなどで組織した（81）。バーレは、99.92パーセントの得票で3選されたが（86）、反対派の活動はやまず、政府軍はハルゲイサやブラオなど反対派の基地を攻撃した（88）。知識人や商人層に多いハウイエ氏族が中心となり統一ソマリア会議（USC）を組織して反政府運動は激化した（89）。政府はモガディシュで反政府活動家を逮捕（89）。人権侵害を理由に国外からの援助が停止し（90）、事実上バーレ大統領の国内への影響力も失われた。USCが首都制圧（1991.1）。追放されたバーレはケニアに亡命し、ナイジェリアのラゴスで急死した（1995.1.2）。心臓発作だった。2011年4月現在に至るまでソマリアには、全土を支配する中央政府は復活していない。

項目名：ハイレ・セラシエ1世

見出原綴 Haile Selassie I,

原綴：Ras Tafari(Taffari) Makonnen

生没年：1892.7.23-1975.8.27

略歴：エチオピアの皇帝(1930/74)。

解説：エチオピア南部ショア地方のオロモ、アムハラ、グラゲなどの民族が混交した家族にメネリク2世の従兄弟にあたる貴族タファリ・マコンネンの子として生まれる。ザウディトゥ女帝(Zauditu [英] Judith 1876-1930。在位1961/30)の縁者としてラス・タファリ・マコンネン（父の名に皇子を意味する「ラス」を冠した名）は摂政兼後継者となり(1916)積極外交を展開、奴隷廃止を約束して国際連盟加入を実現した(23)。女帝の死後ハイレ・セラシエ1世（この名は「三位一体の力」の意）として皇帝に即位(30)。イタリアとの間に紛争が生じ(35)、イタリア軍の攻撃を受けて首都アディス・アベバは陥落し(36)、イギリスに亡命。第二次大戦で、英軍が東アフリカのイタリア軍を撃退したので首都に帰り(41)、復位した。彼の政策は、内政面では最初の憲法を制定し(1931)、さらに改正憲法(55)によって普通選挙制を実施するなど開明的と評される側面をもち、また外交面ではアフリカ統一機構(OAU)創設(63)の立役者となり、その本部を自国に誘置するなど、注目に値する実績を残したと評価されているが、半封建的支配体制は克服できなかった。半封建的支配体制に対する国民の不満を背景とした軍のクーデタによって廃位され(74)、(諸説あるが)翌年病没し

た。ボブ・マーリーほかラスタファリ音楽の信奉者のなかでは、「三位一体」の「神」の顕現とされ、崇拜されている。

項目名：**バンダ，ヘイスティングズ・カムズ**

見出原綴：Banda

原綴：Hastings Kamuzu

生没年：1896？1898-1997.11.25

略歴：マラウイの政治家。マラウイの前身ニャサランド首相（1963-1966），マラウイ共和国初代大統領（1966.7.6-1994.5.24）。

解説：イギリス中央アフリカ保護領時代に現在のマラウイ中部州カスング付近で生まれる。アフリカ・メソジスト教会（AME）司教の援助でアメリカに留学。現在のセントラル・ステート大学を卒（28），教会の援助を得て，アメリカ合衆国に留学。オハイオ州ウィルバーフォース・アカデミー，インディアナ大学，シカゴ大学（31）。人類学者サピア（Edward Sapir :1884.1.26-1939.2.2）や言語学者に対しチェワ語話者のインフォーマントとして協力もした。さまざまな援助を受け，テネシー州のメハリイ医学校卒（37）。ニャサランド国費および各方面からの奨学金でイギリスに渡りエジンバラ大学（41），リバプール大学，グラスゴー大学などで医学を学び（42-44），同時にリバプールやノース・シェフィールドなど英国各地で医師として働いた（42-44）。この際ンクルマ（後ガーナ大統領）やケニヤッタ（後ケニア大統領）らと親交を深めた（45-53）。スコットランド教会での教会活動も熱心だった。マンチェスターで開催された第6回パン・アフリカン会議に参加したニャサランド・アフリカ人会議（NAC）の政治運動家たちと再会する（46）。中央アフリカ連邦が成立したころ（53），ンクルマの招きでゴールドコースト（現ガーナ）に医師として移住。首都クマシに暮らした（53-58）。ニャサランドで政治活動を続ける友人たちの求めに応じて帰国（58）。すぐにマラウイ会議党（MCP）として党活動を開始し，各地で中央アフリカ連邦批判を繰り返す。ローデシアのグウェロ刑務所に投獄（59-60）。釈放後，ロンドンで独立準備会議に出席。既にイギリスは植民地を手放すしかない政情と直面していた。選挙が行われ（61），天然資源と地方行政大臣（61-63），首相就任（63-66）。翌年マラウイ独立（64）。共和国新憲法施行（66）。MCP一党制のもと唯一の候補者として大統領選出馬，当選（66）MCP党終身大統領（70）。マラウイ共和国終身大統領（71）。閣僚からも独裁的傾向を批判されてきた。公式的な呼称にも「偉大なライオン」「征服者」の意味を持つチェワ語，「ングワジ」が冠された。長い一党独裁の間に，教育に力を入れる一方，20万人以上もの反対派を裁判なしで投獄し，メディアを弾圧し，国民の服装を厳しく規制した。3億2000万ドル以上の私財も流用して蓄えたといわれる。アパルトヘイト政策をとっていた南アフリカと国交を結び，援助も受けた。冷戦終結後，モザンビークやタンザニアなど社会主義国に対する防波堤的な役割が終わり，国際社会は民主化への圧力を強めた。国内でも暴動が頻発し，複数政党制への移行を問う国民投票を実施（93）。複数政党化して最初の選挙で南部ヤオ人中

心の統一民主戦線（UDF）代表バキリ・ムルジに敗れた（94）。南アフリカ共和国の病院で死去（97）。101歳だったといわれる。

項目名：**ビジムング， パステール**

見出原綴：Bizimungu

原綴：Pasteur

生没年：1950-

略歴：ルワンダ元大統領（1994.7.19-2000.3.23）

解説：ルワンダのギセニー県に生まれた。フツ系とされる。ハビヤリマナ大統領（Juvénal Habyarimana:1937.3.8-1994.4.6）の政権下で、国立の電気会社の長を務めた。これは縁故主義をとった大統領と懇意だったためという。ポール・カガメ（Paul Kagame:1957.10.23-）率いるルワンダ愛国戦線（RPF）に合流（90）。ルワンダ国軍大佐だった兄弟が暗殺されたことに憤り、ルワンダ愛国戦線（RPF）に合流（90）。ブルンジでフツのンダダイエ大統領（Melchior Ndadaye:1953-1993）が暗殺され（93）、ハビヤリマナ大統領が乗る航空機が墜落して大統領が急死した後（94.4.6）、国家は混乱し、フツによるツチ虐殺、いわゆるルワンダ虐殺が続いた。ルワンダ愛国戦線が首都キガリを鎮圧し政権奪取した後、大統領に就任（94.6）。一般にはフツを牽制し、その過激派を批判するためにルワンダ愛国戦線の総司令官ポール・カガメが仕立て上げた傀儡ともいわれる。副大統領にはカガメが就任した。ビジムングはハビヤリマナを暗殺したのはフツ過激派だとし、イギリス情報局秘密情報部（MI6）にフツ過激派とフランスの特殊部隊が関与していることを示す情報を提供したという。RPFを実際に動かすカガメと意見が対立し、大統領を辞任（00.3）。かわってカガメが大統領に就任した。民主刷新党（PDR）を立ち上げるが（01.5）、過激派フツの温床として政府に党活動を禁止される。従わなかったため逮捕、懲役15年を宣告され投獄（04.6.7）。恩赦により釈放（07.4.6）。

項目名：**ブヨヤ， ピエール**

見出原綴：Buyoya

原綴：Pierre

生没年：1949.11.24-

略歴：第3代（1987.9.9-1993.7.10）および第7代（1996.7.25-2003.4.30）ブルンディ大統領を務めた政治家、軍人。

解説：ベルギー信託統治領ルアンダ＝ウルンディ、ルトヴのツチ民族の家庭に生まれた。ベルギーの大学で社会科学をおさめた後、ベルギー軍士官学校、ベルギー王立軍学校を卒業（75）。戦車兵としての訓練を受ける。のちにフランス（76-77）、ドイツ（80-82）にも留学している（76-77）。この間ブルンディはムワミ（王）を元首とする王国として独立（62）。王国が廃されて共和国となる（66）。第二代大統領ジャン＝バチスト・バガザ Jean- Baptiste

Bagaza 時代にそのツチによる独裁支配に不満を持つツツによる反乱が起こる (72)。犠牲者は 1 万人といわれる。軍少佐だったブヨヤはバガザがカナダで開催された首脳会談に出席中クーデターにより大統領に就任 (87)。ツチ主導の最大政党民族進歩連合 (UPRONA) に身を置きつつも、バガザによって逮捕された 600 人以上の政治犯を釈放し、バガザが強硬に禁止したカトリック教会への規制も緩和した。ツチの強硬派は反発して虐殺に走り、2 万人ともいわれるツツが犠牲となった (88)。責任を問われたブヨヤは、その年の改造内閣ではツツを多数閣僚に任命し、民族対立の緩和政策を推し進め、調停委員会を設けて対立緩和の道を模索した。委員会の提言を入れて新憲法を制定 (92)。複数政党制を合法化し、ひとつの国会、一人の大統領、民族対立のない政府をうたうものだった。ブルンディ初の選挙でブルンディ民主戦線党のツツ出身、メルシオン・ンダダイエ Melchior Ndadaye に破れ、同じく民族融和路線の政権を見守るつもりで引退 (93)。4 ヶ月後にンダダイエは軍に暗殺され、ブルンディは再び内戦状態に陥った (93)。この内戦で 15 万人が犠牲になったとされる。混乱の末再びクーデターで内戦をおさめられない連立政権を追放、暫定大統領 (96) そして大統領に就任した (98)。このブヨヤ軍事政権には国際社会からは経済制裁が加えられたが、ブヨヤは民族対立を導かない組閣につとめた。2000 年、アルーシャでの和平協定で定められたように 2001 年に発足した暫定政権での 1 年半の大統領任期を終えてブヨヤは自ら選んだツツの副大統領ドミシアン・ンダイゼイヨヤ Domitien Ndayizeye にその職を譲った (03)。現在元元首として名誉枢密顧問をつとめている。

項目名：マータイ、ワンガリ

見出原綴 Maathai

原綴：Wangari Muta

生没年：1940.4.1-

略歴：ケニア共和国出身の環境保護活動家、ナイロビ大学教授。ノーベル平和賞受賞者 (2004)。

解説：ケニア植民地時代、現在のニエリ県にケニア最大の民族キクユとして生まれる。父の仕事の都合でリフトバレー州、ナクル付近の白人農場に移住するが (43)、初等教育を受けるため帰村 (47)。ニエリのマータリ・カトリック・ミッションのセント・セシリア初等中等学校卒 (56)。在学中受洗、メアリー・ジョセフィンの洗礼名を受け、教会活動も熱心に行った。マウマウ運動もこの頃のこと、母親はやむなく出身村に逃れた。ロレート女子高校を経て (59)、ケネディ奨学金を得て、カンザス州のセント・ショラスティカ山カレッジに留学 (60-64)。卒業後、ピッツバーグ大学大学院で生物学修士の学位を得て (66)、ナイロビ大学動物学教授の研究助手となるはずだったが、そのポストは他人に渡ってしまう。性差別と民族差別のためだと信じたことが、後の社会活動につながっている。2 ヶ月の後、新設のナイロビ獣医学科解剖学研究室研究助手となる。研究室の主任教授のすすめでギーセン大学とミュンヘン大学に留学し (67-69)、帰国後ナイロビ大学講師 (69)。ナイロ

ビ大学から動物解剖学博士号授与 (71). 東アフリカの女性としては初めて. 動物解剖学学
科長 (76), 准教授 (77). すべて女性初の職位だった. 男女の地位平等を求めて学内でも
積極的な運動を行い, 裁判で敗訴. 学外では, 赤十字社ナイロビ支部長 (73). 国連環境計
画 (UNEP) との連携委員会議長. 74 年に国会議員となった夫の選挙公約である雇用創出に
は植樹などの環境保護運動が欠かせないと考え, 植樹運動を行う. 失敗に終わったが, 活
動が注目されて第一回国連人間居住計画ハビタット会議に出席 (76). ハビタット I での議
論を踏まえてケニア女性会議 (NCWK) において植樹をアピールし, 世界環境の日を記念
してケニア女性会議の会員たちと植樹を訴える行進を行い, 地域や国の発展に貢献したそ
れぞれムランガ, キリフィ, キアンプ, ムミアス, マサイランド, ニャンザ出身の 7 人の
ケニア人を記念して 7 本の木を植樹 (77). グリーンベルト運動の端緒とした. アフリカン・
グリーンベルト・ネットワークに改称 (87). アフリカ全土で植林活動を行い, 民主化, 男
女平等を訴え, 持続可能な開発を推進している. 国会議員 (2002-2007), ケニア・マジンジ
ラ緑の党党首, 環境・天然資源・野生動物省副大臣 (2003-2005). ライト・ライブリフッド
賞受賞 (84). エジンバラ・メダル受賞 (93). ノーベル平和賞受賞 (2004). レジオン・ド
ヌール勲章 (06) 早稲田大学, 関西学院大学, 青山学院大学名誉博士. 京都議定書関連行
事で来日した際に触れた「もったいない」という日本語に感銘を受け, MOTTAINAI キャン
ペーンを展開 (05-). 旭日大綬章 (09).

項目名 : **マシェル**

見出原綴 Machel,

原綴 : Samora Moisés

生没年 : 1933.10-86.10.19

略歴 : モザンビークの政治家.

解説 : ポルトガル領東アフリカ (現モザンビーク) ガザ州マドラゴア農民の子に生まれ,
ポルトガル系カトリックのミッション・スクールで学ぶ (42-46). 首都ロレンソ・マルケ
ス (現マプート) ミゲル病院での病院看護師補助をしながら, 白人と黒人の賃金格差を実
感. マルクス主義的理想を抱くようになる. 創設まもないモザンビーク解放戦線
(FRELIMO)に参加(1963). アルジェリアで本格的なゲリラ訓練を受けたのち, タンザニア
に党の軍事訓練キャンプを開設し(64), 対ポルトガル武装解放闘争を指導. 党中央委員(66-),
軍事委員(66-74), 軍総司令官(69-75). モンドラーネ(Eduardo Mondlane)の暗殺によって党
議長(70)となり, ポルトガルで起こったクーデター, カーネーション革命 (74) により解放
闘争は終結, 暫定政府元首(74-75)をへて初代大統領に就任(75-). マルクス主義の路線に立
って, 社会主義的国家建設に着手した. ポルトガル人の所有していたプランテーションや
財産を国有化, ソビエトのコルホーズ, ソフホーズを範とする農地改革を実施, 農民たち
のための学校や病院・診療所の整備などである. しかしそれらの成果は, 反政府勢力, モ
ザンビーク民族抵抗運動 (RENAMO) の格好のターゲットとなり, 頻発する略奪行為によ

り経済は低迷した。ザンビアでの国際会議から帰国途中、搭乗していた航空機が墜落、死亡(86)。その事故原因が疑われ何度も調査が行われたが、不明(06)。1999年1月、モザンビーク大統領ジョアキン・アルベルト・シサノ、マシエルの妻グラサ・マシエル、グラサが再婚(98)した南アフリカ大統領ネルソン・マンデラの手により墜落現場には記念碑が建てられた。国際レーニン平和賞受賞(77)、ナイジェリア・アフマド・ベロ大学名誉博士(77)。

項目名：**ムウイニ, アリ・ハッサン**

見出原綴：Mwinyi

原綴：Ali Hassan

生没年：1925.5.8-

略歴：第二代タンザニア連合共和国大統領(1985.11.5-1995.11.23)。タンザニア革命党(CCM)元党首。

解説：タンザニア、キサルウェ県、キヴレ生まれ。ザンジバルのマンガブワニ小学校(33-36)、ドール中高等学校を経て、ザンジバル教員養成校卒業(43)。ダーラム大学教育学部に留学後、ザンジバルに戻りザンジバル小学校やザンジバル教員養成校で教鞭をとった(45-61)後ザンジバル教育相事務次官に任命(64)。東アフリカ通貨機構、ザンジバル政府経過報告編集委員会、タンザニア連合共和国国立スワヒリ語評議会など数多くの公職をつとめる。東アフリカ大学評議員、ザンジバル新聞協会評議員もつとめた。ニエレレ初代タンザニア大統領に副大臣に任命(69)されたのをはじめとして厚生相(72)、内務大臣(75-77)、エジプト大使(77-82)、自然資源観光大臣(82-83)、副大統領補佐官(83-84)、ザンジバル大統領兼タンザニア副大統領(84-85)を歴任。ニエレレ大統領引退を受けて大統領に就任(85)。ニエレレのとった社会主義路線から一転、輸入を規制緩和し、私企業にたいする優遇措置をとった。二期目には、開発援助国の外圧もあつて複数政党性を導入。一方金融政策には不備が多く、市場に通貨を過剰に流通させたため、国内経済は激しいインフレに悩まされた。その政権下で汚職や脱税、贈収賄が横行したことで知られている。しかし、それまで社会主義経済だったタンザニア経済の舵を自由主義経済へと大きくきって短期間に経済成長を成し遂げる第一歩が、ムウイニ政権下で踏み出されたのも事実だった。大統領職を退いてからは(95)、ダルエスサラームで隠居生活を送っている。

項目名：**ムセベニ (ムセヴェニ), ヨウエリ・カグタ**

見出原綴：Mseveni

原綴：Yoweri Kaguta

生没年：c.1944-

略歴：ウガンダの政治家。第7代大統領(1986.1.26-)。

解説：ウガンダ南西部ントウンガモ県に生まれる。アンコレ人。チャマテ・ボーイズ(53-58)、

ムバララ高校 (59-60), ンタレ高校 (61-66) を経てダルエスサラーム大学 (67-70). オボテ政権の大統領府調査局につとめていたが (70-71), イディ・アミン・ダダ (Idi Amin Dada:c.1928.1.1-2003.8.16) のクーデターが起こり, タンザニアに亡命 (71). 救国戦線 (FRONASA) を結成する (73). モシ大学で講師も務めた (74-76). ウガンダ軍がタンザニア西部の領有権を主張し, 国境を侵犯したのをを受けて反アミン勢力が結集してウガンダ民族解放戦線 (UNLF) 結成. 同時に成立した新政権のための国民諮問会議の議長はユセフ・ルレ (Yusuf Kironde Lule:1912-1985.1.21) であり, ムセベニは 11 人の執行役員のひとりだった. アミンが敗走し, ルレ政権が成立すると国防担当大臣 (79.4-6), 内紛によってルレが失脚し, 成立したビナイサ政権 (Godfrey Lukongwa Binaisa QC:1920.5.30-2010.8.5) で国防大臣 (79.6-11), 地域協力大臣 (79-80). ムセベニを国防大臣から外したのはビナイサが軍を直接掌握しようとしたためとみられている. さらにオジョク参謀長を解任しようとしたビナイサをムワンガ (Paulo Muwanga:1924-1991.4.1), ティトー・オケロ (Tito Lutwa Okello:1914-1996.6.3) らとともに軟禁し, ムワンガを議長, ムセベニを副議長とする大統領委員会が総選挙を実施した (80.12). ムセベニはウガンダ愛国運動 (UPM) を組織して選挙を戦うが, オボテ率いる UPC に敗北. 第二次オボテ政権が成立した (80.12.15). ムセベニは支持者とともに出身地である南西部に戻り, 民衆抵抗軍 (PRA) を結成, 同じく南西部のムベンデ県の軍施設を攻撃した (81.2). ルレ率いるウガンダ自由戦士 (UFF) と合流して国民運動 (NRM) を結成し, 第二次オボテ政権のウガンダ軍と衝突した. NRM は, 長期政権樹立のために, 民主主義の回復, 治安, 国民統合, 独立, 統合された自律的経済, 社会サービス, 汚職と権力濫用の根絶, 不平等の是正, アフリカ諸国との協力, 混合経済といった「10 点のプログラム」を打ち出した. 以降の泥沼化するゲリラ戦での犠牲者は 10 万人とも 30 万人ともいわれ, 反政府軍を制圧できないオボテ政権は国際社会での評価を損ね, むしろムセベニらに期待が高まるなか, UPC 党内の内紛が原因でオボテはまたも国を追われ (85.7.27), バジリオ・オララ=オケロ (Bazilio Olara-Okello:1929-1990.1.9) が軍事評議会議長 (85.7.22-7.29), 後, ティトー・オケロが大統領に就任 (85.7.29). ケニアのモイ大統領が仲介に乗り出し, 停戦とカンバラの非武装化, NRA のオケロ率いるウガンダ民族解放軍 (UNLA) への統合などを定めたナイロビ合意に署名されたが, お互いにその合意を遵守することはなかった. ザイール (現在の今後民主主義人民共和国) からの干渉もあったが (86), NRM は徐々に勢力を拡大し, 首都カンバラを制圧 (86.1. 25), ムセベニは大統領に就任 (86.1.29). 「抵抗運動」体制を宣言した. 村を第 1 抵抗議会 (RC1) とし, 順次県レベルの第 5 抵抗議会 (RC5) まで地方自治体ごとに直接選出した議員からなる 5 段階の議会を設けた (現在では地方議会 (LC) に改名). マルクス主義的政策をとらず, IMF や世界銀行の構造調整を積極的に受け入れ, 歳入削減, 国営企業の民営化など新自由主義体制下での経済立て直しに取り組んだ. NRM に軍籍のあったルウィゲマ (Fred Gisa Rwigema:1957.4.10-1990.10.2) やカガメ (Paul Kagame:1957.10.23-) が率いるルワンダ愛国戦線 (RPF) がルワンダに侵攻し (90), 苦難の末に新政権を樹立するまで (94) ムセベニは

批判を浴びつつ密かに協力したといわれる。アフリカ統一機構（OAU）議長（91-2）。ウガンダ北部に潜伏する反政府ゲリラ「神の抵抗軍」（LRA）を支持しているとして、スーダンとは国交を断絶している（95）。大統領選挙では投票率 72.6 パーセントのうち、75.5 パーセントの得票で再選（96.5.12）。隣国コンゴに議会の承認なしにルワンダとともに侵攻したことは（98）、国際司法裁判所で争われコンゴ民主共和国への賠償が命じられた（05）。憲法の 3 選禁止条項を撤廃した上での大統領選でも依然として 60 パーセントの得票で 3 選（06）。2011 年の選挙でも 67.99 パーセントの得票率で 4 選を果たしている（11）。

著作：Sowing the Mustard Seed: The Struggle for Freedom and Democracy in Uganda, Oxford: Macmillan Publishers Limited, 1997

項目名：ムテサ 2 世

見出原綴：Mutesa II

原綴：Edward

生没年：1924.11.19-1969.11.21

略歴：ブガンダ王国王（カバカ）在位：1939-1969、ウガンダ初代大統領（1963-1966）。

解説：マッキンディエのアルバート・クック卿の邸宅でダウディ・チェワ二世（Daudi Chwa II: 1897-1939）の 15 子、5 男として生まれる。父王の死により 15 歳で即位。18 歳の誕生日に戴冠。それまでは摂政がついていた。キングズ・カレッジ、ブド卒業後、ケンブリッジ大学のマグダレン・カレッジ留学。近衛歩兵連隊入隊。イギリスの構想にあった東アフリカ連邦が実現すると、アフリカ人はすべて白人の支配下に置かれるとのおそれがあった。カバカは連邦化に反対したことから総督アンドリュー・コーエン卿（Sir Andrew Benjamin Cohen, KCMG, KCVO, OBE: 1909.10.7-1968.6.17）と対立し、ついには逮捕されてイギリスに送られた（53）。2 年の亡命生活の後、帰国して復位（55）。1962 年の独立後には執行権のない大統領となった（63）。王国は王と王国議会（ルキコ）を決定機関とし、連邦内では半自律的な立場を与えられていた。連邦は、内閣総理大臣オボテ（Apolo Milton Obote: 1925.12.28-2005.10.10）の率いるウガンダ人民会議（UPC）とムテサ率いる「カバカ・イエッカ」（「王」あるのみ、の意）（KY）との連立政権だった。二つのカウンティをブガンダ側からブニョロ側に編入するといういわゆるロスト・カウンティ問題をめぐる国民投票で両党の利害は衝突した（64）。コンゴからの象牙と金の密輸にオボテらの関与を指摘する KY 党員の暴露に対し、オボテは UPC の党员 4 名を逮捕し、憲法を改正して全権を大統領に集中させ、自ら大統領に就任した（66）。これを受けてブガンダ王国議会は、ウガンダ連邦政府との絶縁を宣言し、政府のブガンダ王国領地からの退去勧告を出した。オボテの命を受けた司令官アミン（Idi Amin Dada: c.1925-2003.8.16）はムテサの王宮を砲撃したが、ムテサは降り出した大雨に乗じて王宮を脱出、ブルンジを経てイギリスに亡命した（66）。1967 年の憲法ではすべての王国は廃止され、1993 年まで復活を認められなかった。ムテサは亡命して 3 年後に死亡した（69）。死因は急性アルコール中毒だった。一般には自殺と見られ

ているが、一説には何者かに無理やり飲まされて殺害された、ともいわれる。ムテサの遺骸をウガンダに持ち帰って国葬を行ったのは(71)、クーデターでオボテを追い落として政権を奪取したアミン大統領だった。ムテサには正式な11人の妻がおり、11人の男子と11人の女子をもうけた。1993年ムセベニ(Yoweri Kaguta Museveni: 1944-)政権下で王国復活が認められると、ムテサの次男ムテビ2世(Ronald Edward Frederick Muwenda Kimera Mutebi II:1955.4.13-)が王位を継承した。

著書：The Desecration of My Kingdom. London: Constable, 1967

項目名：サイイド・ムハンマド

見出原綴 Sayyid Muhammad,

原綴：‘Abdullāh Hasan 諸国語綴：ソマリ語 Sayid Maxamed Cabdille Xasan

別名：狂気のムッラー--- 出現書名：Abdi Sheik Abdi, Divine Madness: Mohammed Abdulle Hassan (1856-1920), Zed Books Ltd., London, 1993

生没年：1856.4.7-1920.12.21

略歴：ソマリアの宗教改革運動指導者、初期抵抗運動指導者。

解説：エチオピア・オガデン生まれ。ダロッド氏族の支族、オガデン氏族。19歳でシャイフ。30歳のときメッカ巡礼、神秘主義者モハメッド・サーリフに師事、サーリヒーヤ派の教えを受ける。サーリヒーヤ団の指導者としてキリスト教の排除、イスラーム教の浄化、ソマリ人の団結、イギリスからの独立をうたうダラーウィシュ国建国を宣言。遊牧民を基盤とし他氏族に働きかけて勢力を強め、イギリスとその同盟国であるキリスト教国エチオピアに対してジハード(聖戦)を開始した(1899)。イギリス・エチオピア・イタリア同盟軍はこの<反乱>を鎮圧しようとした(1900-04)が、各地の氏族の協力を得、拠点を転々として抵抗、イタリアの保護下に入るという条件つきながらその自治権を認める一時的な和平を勝ち取った。その後イギリスとの戦闘を再開したが(08)、第一次大戦後トルコ、ドイツからの支援を失い、イギリス軍の無差別爆撃を含む総攻撃を受けて根拠地タレークを落とされ(20)、オガデンに撤退。天然痘と牛疫の流行に乗じてイギリスが派遣したソマリ人部隊に攻撃されて軍は壊走し、オロモに潜伏したムハンマドも間もなく病没した。20年に及ぶこの戦闘は「サイイド・ムハンマドの反乱」「狂気のムッラー運動」と呼ばれた。中央集権的な思想は対立も生んだが、彼はこの抵抗運動の過程で氏族の枠を超えたソマリ人の団結意識を生みだし、後の民族主義運動に大きな刺激をあたえたと評価されている。

項目名：ムルジ, エルソン・バキリ

見出原綴：Muluzi

原綴：Elson Bakili

生没年：1943.3.17-

略歴：マラウィ共和国の政治家。第二代大統領(1994.5.24-2004.5.24)。統一民主戦線(UDF)

党首.

解説：イギリス中央アフリカ保護領（現在のマラウイ）、カスペに生まれる。ムピラ小学校（58-9）、マロサ中学（60-64）を経て、デンマーク、ティステド技術専門学校（72-73）イギリス、ボルトン・カレッジ（73）に留学。技術教育のディプロマを取得。ナサワ技術専門カレッジ校長（73-75）。国会議員に立候補，当選（75）。若者と文化省書記（76），教育大臣（76-77）。国会内英連邦連絡委員（75）。マラウイ会議党（MCP）で支部長など要職を担っていたが，マラウイ共和国が複数政党制となり初めての大統領選挙に統一民主戦線（UDF）代表として出馬，47.2パーセントの得票率で当選（94.5）。ニャサランド時代を含め実に30年以上独裁を続けたバンダを破り大統領となる。贈収賄や，援助金の私的流用など，数々のスキャンダルがあったが，長いバンダ大統領独裁のあとの民主的大統領として選挙地盤の南部ヤオ民族中心に強い人気を誇った。その後1999年の大統領選挙でも52.4パーセントの得票率で圧勝。3期目をにらんで三選を禁じた憲法を改正する案を提出したが，反対デモが起こり，改正案は通らなかった。二期10年の任期を満了して退任（04.5）。UDFの公認候補，第二次ムルジ政権の経済・開発大臣ビング・ワ・ムタリカ（Bingu wa Mutharika:1934.2.24-）が大統領となった。依然としてUDF党首であったムルジはムタリカの得票数と議席の獲得数が伸び悩んだところから他の政党との連携を模索し，彼の影響力の増大を恐れたムタリカとの関係が緊張した。ムタリカはUDFが汚職問題への取り組みが甘いとしてムルジおよびUDF党と対立。UDFを去って民主進歩党（DPP）を旗揚げ（05.2）した。2006年，ムルジは詐欺と不正を告発され逮捕（06.7.27）されたが，その日のうちに釈放された。2007年4月にはムルジは強い党の希望でUDF公認大統領候補に指名された。一度大統領職を退いているので，再選二期まで，とする憲法には抵触しないというのが論拠だったが，憲法審議会とマラウイ選挙管理委員会は，ムルジ出馬を認めなかった。2008年には，ムタリカ暗殺計画に加担した疑いで，ムルジの側近8名が逮捕された（08）のに次いで英国から帰国したムルジも空港で逮捕され（08.5.25），ブランチタイアで自宅監禁された。2009年には，86件の汚職，なかでも1,700,000,000クワッチャ（約11,000,000ドル）の援助資金を私的流用した疑いで告発されている（09.2.26）が，一連の告発，逮捕は自分を大統領職に復帰させないための政府の陰謀だとしている。大統領選はムタリカが64.36パーセントの得票で再選（09.5）。1期目の経済政策が経済成長に結びついたことが票につながったとみられる。

項目名：**モイ，ダニエル・トロイティッチ・アラップ**

見出原綴：Moi

原綴：Daniel Toroitich Arap

生没年：1924.9.2-

略歴：ケニア共和国第二代大統領（1978.8.22-2002.12.30）。

解説：英領東アフリカ，リフトバレー州のバリング県，サッチョ地区出身。異名はサッチ

ヨ. タンバッチ教員養成校を経て、教員 (46-55). リフトバレー選挙区から立法審議会に議員として選出された (55). 中央集権を唱えるケニヤッタ率いるケニア・アフリカ民族同盟 (KANU) に対抗して連邦分権を目指すケニア・アフリカ民主連合 (KADU) を結党した (60). 独立準備暫定政権の教育相として入閣 (60-61). 独立後 (63.12.12), ケニヤッタの説得を容れて KANU に合流. KANU はケニア唯一の政党となった. 少数民族カレンジン出身ながらリフトバレーに熱烈な支持者がいるモイにケニヤッタは、地方行政大臣 (62), 内務大臣 (64), 副大統領 (67) の職を与え配慮をみせた. ケニヤッタ死去に伴い大統領に就任 (78). 対外的には英連邦, 国連, アフリカ統一機構 (OAU) に加入し, OAU 議長 (81-83) もつとめた. 内政的かつ外交的な最重要課題は、共産主義の駆逐だった. 6 時間ほどで制圧されたヘゼキア・オチュカ (Hezekiah Rabala Ochuka:1953.7.23-1987.7.9) のクーデター (82) を機にモイは反対勢力とマルクス主義者のあぶり出しに乗り出し, ケニヤッタ政権の残党を権力中枢から追放. 憲法を改正して一党制を明文化した. 秘密警察の暗躍の前にアカデミズムは沈黙を余儀なくされ, マルクス主義は大学の教壇から消えた. 以降少数民族カレンジンを優遇し, 多数派キクユを抑圧する独裁的長期政権が続いた. ところが冷戦終結後, 共産主義に対する防波堤の役割がなくなったこと, 原油価格の高騰, そして農産物など第一次産業製品の価格下落などの影響で国内経済は冷え込み, 不満の声が高まった. アメリカなど西側諸国からの民主化への圧力も強く, 半ば開発援助とのバーターのかたちで党内の反対を押し切り複数政党制を認めた (91). 有力な候補者のいないなか, 多民族国家間の少数民族の不安を巧妙にあおって支持層を固め, 民主化後も二期まで当選を重ねた (92,97). 三期目を期待する支持者も多かったが, 高齢を理由に政界引退を表明 (02). 後継の大統領候補にはケニヤッタの息子, ウフルー・ケニヤッタ (Uhuru Muigai Kenyatta:1961.10.26-) を指名した. ケニヤッタの大統領選挙での得票率は 31.2 パーセントにとどまり, 62.3 パーセント得票したムワイ・キバキ (Emilio Mwai Kibaki:1931.11.15-) に大差で破れた. 引退後は概ね政界から遠ざかっていたが, 新憲法案がケニア人の政治への期待に即さないとして反対を表明, 新憲法案は棄却された (05). キバキ大統領の特命全権平和大使としてスーダンに派遣された (07) ことはキバキによるモイ懐柔ととられた. 選挙では, 大方の予想通りキバキ再選の支持を正式表明した (07).

項目名 : **オディンガ, ライラ**

見出原綴 Odinga

原綴 : Raila Amolo

生没年 : 1945.1.7-

略歴 : マランダ高等学校卒 (62), ヘルダー専門学校 (東ドイツ) (63-64), 奨学金を得て, 現マクデブルク大学に留学 (65-70), 機械工学ディプロマ (70). ナイロビ大学講師 (71-74).

解説 : モイ政権転覆計画に加わった疑いで逮捕監禁 (82-88). 再逮捕 (88). 容疑は当時一党だったケニアに複数政党制を実現することを目的とする地下組織, ケニア革命運動

(KRM: Kenya Revolutionary Movement) への関与. 再び釈放後 (89), 再逮捕 (90). 釈放後 (91), 暗殺をおそれノルウェーに避難 (91). 帰国後, 父親でケニア初代副大統領のジャラムギ・オギンガ・オディンガ (Jaramogi Oginga Odinga 1911-1994.1.20) 率いる結成されたばかりの民主主義回復フォーラム (FORD: the Forum for the Restoration of Democracy) に加盟, ランガタより国会議員に選出され, 党の一般委員会の副議長 (92). 父の死後, 党内の覇権争いに敗れ, 国家開発党 (NDP) 入党. モイに接近してケニア・アフリカ人民族同盟 (KANU: Kenya African National Union) の幹事長となる. エネルギー相 (01-03), 道路公共事業住宅相 (03-05). 憲法で決められた最終の第三期をモイが終えるときには後継者と目されていたが, モイはケニヤッタの息子ウフルーを後継にし, ライラにも公に協力を求めた. この動きに抗議した一群は自由民主党 (LDP: Liberal Democratic Party) に入党し, いくつかの党との連合を経て国民虹連合 (NARC: National Rainbow Coalition) を結成. 大統領キバキが, 閣僚ポストを配分しないことに抗議し, NARC を離脱, オレンジ民主運動 (ODM: Orange Democratic Movement) を組織. ODM 党首として臨んだ大統領選では (07.12.27), キバキに敗退. 同時に実施された国民議会選挙ではキバキ率いる国民統一党 (PNU: Party of National Unity) に対して ODM が圧勝した. EU 選挙監視団が, 大統領選の投票はキバキ有利に操作された, との見解を示し, 共に大統領選に不正があったとして市民の暴動が相次いだ. コフィ・アナン元国連事務総長の仲介で和解し, キバキはそれまでの憲法下ではなかった内閣総理大臣職を新設. オディンガは独立直後のケニヤッタに次いで第二代内閣総理大臣となった (2008-).

項目名: **ラヴァルマナナ, マーク**

見出原綴 Ravalomanana

原綴: Marc

生没年: 1949.12.12-

略歴: マダガスカル政治家. 前 (第5代) 大統領 (2002.5.6-2009.3.17).

解説: マダガスカル, メリナ人. 熱心な改革派プロテスタントの信者だった. 少年時代のヨーグルトの行商から身を起こし, マダガスカル最大の日用品メーカー, ティコを設立, 社長となる. アンタナナリボ市長に立候補, 45 パーセントの得票率で前内閣総理大臣を破り, 当選 (99). 「私はマダガスカルを愛する党」(TIM) の候補として大統領選に出馬 (01). 現職のディディエ・ラツィラカ (Didier Ratsiraka:1936.11.4-) の得票率 40 パーセントに対し, 46 パーセントを得票. 過半数を超えていないため決選投票になるはずだったが, 決選投票を拒否し勝利宣言, 最高裁に判断を求め一方で大統領就任を宣言した. ラツィラカも勝利宣言を出して政権委譲を拒否. ラツィラカは非常事態宣言を出し, 臨時首都をトアマシナに置く. ラツィラカ支持の群衆は首都を封鎖. 燃料, 医薬品の搬送を妨害した. 最高裁判決でラヴァルマナナ勝利が確定 (02). 続いて国連からラヴァルマナナ支持の表明があり, ラツィラカは国外退去した. 周辺諸国との関係改善をつとめ, アフリカ連合へ (AU) の復

帰を果たす。ラヴァルマナナの選挙公約は、道路などのインフラと教育、医療などの改善だったが、経済が停滞して実現にはほど遠く、多くの批判を浴びた。それでも二期目も 54.6 パーセントの得票率で勝利。特に首都アンタナナリボでの支持は 75.39 パーセントに達した (07)。IMF、世界銀行、EU、アフリカ開発銀行など主なドナーは、大統領のビジネスと国家の利益が混同されているとして直接の経済支援を中止した (08)。アンタナナリボ市長アンドリー・ラジョエリナ (Andry Nirina Rajoelina: 1974.3.30-) が自ら経営するテレビ局の放送で政府批判を行ったのを受けて市長を解任 (09)。市長支持者により大統領の経営する工場や倉庫が焼かれ、多くの犠牲者が焼死した。また退陣要求を突きつけた 20,000 人のデモ隊が大統領宮殿に押し寄せ、それに対し警護部隊が発砲して少なくとも 30 人の死者、数十名の重軽傷者など多くの犠牲者が出た。軍内部には民衆に対する実力行使を指示する大統領命令に不満が高まっており、ラジョエリナの呼びかけに応じて、軍は大統領宮殿を占拠する行動に出た。ラヴァルマナナは不在だったが、自らのリーダーシップの失墜を目の当たりにし、スイスに逃れた (09)。暴力による政権奪取には EU や AU、そして南アフリカなどから避難を浴びたが、ラジョエリナが暫定政府大統領に就任 (09)。70,000,000 ドルもの大統領専用機購入など職権濫用の罪状でラヴァルマナナには懲役 4 年、続いて終身刑の判決が下されている。

項目名：ラジョエリナ， アンドリー

見出原綴 Rajoelina

原綴：Andry Nirina

生没年：1974 .3.30-

略歴： マダガスカル政治家。第 6 代大統領 (暫定。2009.3.17-)。テレビ・ラジオ放送局オーナー。

解説： 高校をドロップアウトし、首都アンタナナリボのクラブやバーでディスクジョッキーなどをして成人まで過ごす。ラジオ放送局と広告会社のオーナーとなってから有名になり、フランスの超特急列車 TGV の異名をとる。アンタナナリボ市長選に出馬、得票率 63.3 パーセントで当選 (07)。ラジョエリナの所有するテレビ放送局「ビバ TV」が、前大統領のディディエ・ラツィラカ (Didier Ratsiraka:1936.11.4-) のインタビューを放映したことで政府の閉鎖命令を受ける (08)。ラジョエリナはアンタナナリボで反政府キャンペーンを展開、大統領の独裁政治とその貧困削減政策を批判し、大統領に退陣要求をした (09)。支持者も暴徒と化し、政府系のおもだった放送局には火がつけられ、略奪行動が繰り返された。犠牲者は数十人に上った。大統領はラジョエリナ市長解任を宣言するが (09.2.3)、火に油を注ぐことにしかなかった。ラジョエリナとその支持者ら 20,000 もの暴徒が大統領宮殿を襲い、警備が発砲。数十人が命を落とした。一連の騒動での死者は 130 人以上とみられている。民衆を攻撃する大統領命令を受けた軍は当初は従ったが、やがてその正当性に懐疑的となり、ついには大統領宮殿を制圧。ラヴァルマナナは不在だったがそのままスイ

スに逃れた。ラジョエリナは 35 歳で、40 歳以上という現行憲法の大統領の条件に見合わないで、24 ヶ月以内に新憲法下での選挙実施を宣言した。軍部の武力を背景にした政権奪取ただただに南アフリカや EU, AU など、援助国や各団体からは批判が相次いだ。予定を早めて行われた新憲法草案の選挙では (10.11.17), 73 パーセントが賛成票を投じたが、選挙監視委員会はいくつもの違反を指摘している。新憲法下では暫定政権大統領であるラジョエリナが、時期大統領選まで大統領職にあることが明記されている。次回選挙は 2011 年 5 月 4 日を予定している。新憲法下では大統領の年齢制限は 35 歳まで下げられ、選挙前 6 ヶ月間はマダガスカルに滞在していることが立候補条件になっているため、亡命中のラヴァルマナナら対立勢力は立候補できないことになっている。

項目名：**ンクルンジザ, ピエール**

見出原綴：Nkurunziza

原綴：Pierre

生没年：1963.12.18-

略歴：ブルンジ大統領 (05-)。CNDD-FDD 党首。元ブルンジ大学講師，軍司令官。

解説：ブルンジ首都ブジュンブラのフツの家庭に生まれる。ンゴジの小学校，キテガの中等高等教育を経て，ブルンジ大学へ進学 (90)。教育学とスポーツを専攻する。父は 1965 年に当選した国会議員でその後州の知事を務めていたが，1972 年に 100000 人以上が犠牲になったというブルンジ虐殺の犠牲者となり死亡した。の紛争勃発当時ンクルンジザは，ブルンジ大学の講師だった。フツで初めてのブルンジ大統領ンダダイエ (Melchior Ndadaye:1953-1993) も暗殺された (93)。ンクルンジザは，ツチの軍が大学キャンパスを攻撃し，200 名あまりの学生を殺害し，自らも九死に一生を得たことを機に民主防衛国民会議 = 民主防衛軍 (CNDD-FDD) に入隊 (95)。着々と昇進し，司令官となる (01)。和平合意後は，CNDD-FDD は政党化し，ンクルンジザはドミシアン・ヌダイゼイエ (Domitien Ndayizeye:1953.5.2-) 大統領率いる暫定政権のガヴァナンス大臣として入閣 (03)。このときまでに 1 人を残し 5 人の兄弟姉妹を失っている。国政選挙では上院・下院とも CNDD-FDD が大勝し，国会で唯一の候補，得票率 81.5 パーセントの圧倒的な支持を受けて大統領に選出された (05.8.26)。